

第21回 筑前木屋瀬宿場まつり

21回を迎えた「筑前木屋瀬宿場まつり」は11月3日開催されましたが、当日はあいにくの雨、多くの来賓と参加者でテントが満杯になった開会式も雨の中で行われ、祭りは雨天用プログラムでの実施を余儀なくされました。「長崎街道筑前六宿開通400年」「北九州市市制50周年」記念事業として企画した、「筑前植木岡分流入大行列」は、そぼ降る雨の街道で実施、「筑前六宿プレ子どもサミット」は木屋瀬宿場をどりに筑前各地の伝承盆踊りとともに、こやのせ座にて行われました。



■ 雨中の大名行列

雨天とはいえ、準備して待機していた植木大名行列保存会から、「このくらい雨なら大名行列は行います」と申し出があり、昼過ぎに小雨降る西構口を出発、東構口までを3時間間で往復、この間10回の「振り」を行い、これに街道筋の観衆から大喝采が起り盛り上がった祭りとなりました。大名行列には子どもが40人参加していましたが、全員びしょ濡れで一生懸命頑張っていました。後日保存会から、「木屋瀬の長崎街道筋での大名行列を実現できて良かった、有難うございました」とお礼のお言葉がありました。一方雨天とはいえ、街道ではスタンプリナー、町並み史料館、青空市場、ポン菓子、フリーマーケット、その他多くの出店が並び多くの人が行き交い、スタンプリナーの参加者も200名を越え、「宿場まつり」が地域に定着した祭りになったと感じました。

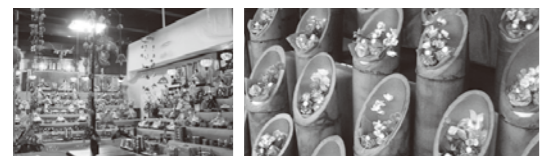


平成25年度「筑前木屋瀬宿場まつり」実行委員会 企画部会長 近藤 浩

第53回企画展 開催中!! 長崎街道 ひなまつり

第53回企画展「長崎街道 ひなまつり」(平成26年2月15日(土)~3月30日(日))を開催しています。

去年のひなまつりイベントに引き続き、石坂の立場茶屋銀杏屋(3月16日(日)まで)と木屋瀬のもやいの家(3月30日(日)まで)、旧高崎家住宅【伊馬春部生家】(3月29日(土)まで)、木屋瀬宿記念館(3月30日(日)まで)の4施設連携してひなまつり企画を行っています。それぞれの施設で趣を変えて、古式の雛飾りやさげもん等の展示を行い、また3月1日(土)~3月3日(月)の間、「立場茶屋銀杏屋」と「もやいの家」では甘酒などの振る舞いも行っておりますので、この機会にぜひお越しください。



こやのせ 宿場町木屋瀬。心に郷土が染みしてくる。歴史とふれあう記念館。

寄せ太鼓

長崎街道木屋瀬宿記念館 広報部 北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号 (〒807-1261) TEL 093-619-1149 FAX 093-617-4949

祭りには各団体、町内会より約100名の方々にスタッフとしてお世話して戴きました。また多くのボランティアの皆さんありがとうございました。このお祭りは地域の皆様の協力と参加で行われています。今年も、「地域の文化と伝統の伝承」をコンセプトに子どもも参加できる楽しい企画で多くの方が参加できる祭りになるよう頑張ります。今後とも皆様のご協力と参加をよろしくお願い致します。

木屋瀬の「おもてなし」ホスピタリティ受賞



木屋瀬まちなみ案内の会 和田亀男会長 / みちの郷土史料保存会 松尾良美会長

この度の授賞は、木屋瀬宿記念館内の説明を担当される「みちの郷土史料保存会」、また木屋瀬宿場町の歴史を説明される町並み案内担当の「木屋瀬宿まちなみ案内の会」の長年にわたる日頃の活動が評価されたものです。今後ますますのご活躍を祈念いたします。記念館にお立ち寄りの際はぜひ、保存会やまちなみ案内の会の方に木屋瀬宿場町の歴史話を聞いてみられてはいかがでしょうか。

第30回 白髪山西元寺 本堂落成慶讃法要



昨年完成した西元寺の本堂

平成二十六年の今年は十二支の暦では、甲午の年であり、六十の組み合わせが戻った時を遷暦といつて、六十歳のお祝い等をする風習がある。さて、木屋瀬の祇園町通りにある、古刹「浄土真宗本願寺派白髪山西元寺」は、本堂新築の為の事業を六年間に亘り行い、昨年秋に完成し、平成二十五年十一月九日、十日の二日間、本堂新築落成慶讃法要と宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌法要が厳修されました。

西元寺は、天正十年(1582)本山十一世顕如上人から本尊を賜り、嘉永元年に仏殿を創立して、西元寺と称するようにあります。今年の干支「甲午」は、千支の組み合わせでは、三十一年目でも新しい時代の幕開きの年とも言われています。昨年伊勢神宮の式年遷宮や出雲大社の六十年に一度の遷宮などもあり、時代の変化の息吹が感じられます。さて、木屋瀬の祇園町通りにある、古刹「浄土真宗本願寺派白髪山西元寺」は、本堂新築の為の事業を六年間に亘り行い、昨年秋に完成し、平成二十五年十一月九日、十日の二日間、本堂新築落成慶讃法要と宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌法要が厳修されました。

多数のご来館・ご参加 ありがとうございます

第52回企画展【城郭展】

第52回企画展「福岡城と筑前城郭展」(平成25年11月2日(土)~12月1日(日))は、昨年の第48回企画展「城郭展~今よみがえる名城~展」に引き続き、筑前城郭研究会の方々にご協力いただき、福岡城はじめ精密に再現したジオラマを展示しました。今年1月から放送開始した「軍師 官兵衛」で話題になった黒田藩の資料等も併せて展示致しました。期間中、842名とたくさんの方に来館していただきました。誠にありがとうございました。



講座「木屋瀬時代の散歩道」

平成25年9月20日(金)~10月25日(金)に行われた講座「木屋瀬時代の散歩道」も、今回で11年目となりました。全6回の講座を開催し、木屋瀬、八女の町並み、長崎街道、木屋瀬いろは歌留多、黒田官兵衛をテーマにした講義や、木屋瀬をはじめ長崎島の長崎街道永昌宿、矢上宿の見学を実施しました。今年の参加者は46名と多くの方が熱心に受講してくださいました。ありがとうございました。

NewYearコンサート in こやのせ座

木屋瀬宿記念館では平成26年1月19日(日)、響ホール室内合奏団の方をお迎えしてコンサートを行いました。合奏団の方のわかりやすく、楽しい説明と共に素晴らしい演奏を披露してくださいました。ベートーヴェンやモーツァルトなどクラシックの名曲や、最近話題となった「あまちゃん」のテーマソングなど幅広いジャンルの演奏で会場を盛り上げていただきました。また、途中イントロクイズなどを行い、普段クラシックに馴染みの無い方でも楽しんでいただけたと思います。

来場者は約250名と大勢の方にお越しいただきました。誠にありがとうございました。



なりました。その後幾度か改築新築を繰り返して、江戸時代の文久元年(1861)に建築された本堂を、平成二十一年まで護り伝えておりましたが、百四十余年の歳月が経って、傷みがひどく危険な状態になり、門信徒の本堂新築の発議により、五年前より本堂を解体し新築に取り掛かり、昨年無事に本堂が新築落成しました。この間、平成二十一年三月に本堂解体とご本尊のご遷座法要を行い、翌年三月には起工式、二十三年十月に上棟式、二十五年三月に入仏法要を行い、二十五年十一月に本堂関連の全工事が完了いたしました。新築の本堂は、日本古来の



稚児行列も華やかに行われました

木造の寺院建築技法を駆使し、樹齢二百年を超す巨木を磨き柱とし、真宗寺院には珍しく堂内には、塗り物の装飾は一切使わずシンプルに木材の素材を活かした白木の建築です。本堂の大きさは、幅七軒奥行八軒半で、能登ヒバ材(通称アテ)を使った建築です。能登ヒバは、石川県の県の木で、県の農林水産部のデータによると、檜より湿気に強く堅牢で粘りつきよく、木肌が綺麗で害虫に強いとして、国産材木で最高の品質と記されています。瓦屋根は、京都西本願寺の屋根を葺いた職人が一万枚の瓦を使って仕上げました。屋根の姿も見事な形を現しています。又、新ご本尊は現

代の名工と言われる、京都の江里康徳大仏師の作で、袈裟にはキリガネ工法を用いた装飾がなされ、慈愛に満ちた香気溢れるご本尊です。落成慶讃法要には多くの僧侶が出動し、本堂に参集した門信徒の南無阿弥陀仏の音が響きわたるなか、浄土真宗本願寺派の作法にのっとり、雅楽を用いた音楽法要が二日間に亘って厳修されました。ご本尊には、献灯、献花、伝供等がなされ内陣の荘厳も華やかでありました。又、新築を祝い稚児行列も行われ、感田町の松尾家を稚児宿として、西元寺までの道を華やかに行列して、本堂新築という稀にみる仏縁に華を添えました。

菊日和長崎街道稚児の列 新築の本堂に座す初明り (本町 野口靖彦)



江戸時代から伝わる恵比須頭(かしら)子どもるびす

12月7日、8日須賀神社にて6名の児童により、ます平成25年度子供恵比須頭が行われました。この祭りは、木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒ある行事で、男子が数え年11歳(現在の4年生)になりますと地域の若衆(わかしゅう・大人)の仲間入りをする儀式として執り行われたものです。昔は、男の子もこの年頃になりますと奉公(ほうこう)に出たり家業の手伝いをしたりして、子供時代に別れを告げる習慣があり、この期を境に大人の仲間に入る事になります。武士社会では「元服(げんぷく)」として祝福したそうですが、これに相当する町民方の行事だと思われ、現在では、毎年12月の第一、土曜日と日曜日の2日間に渡って行なわれ、笹山笠を作りそれに紅白の幕を張り、頭(かしら)になった子供の名前を書いて町内を練りまわります。笹山笠の巡行の他には、須賀神社に伝わる社宝(御幣(ごへい)獅子頭(ししがしら)など)を奉持した神幸の行列が「とまれとまれ旅の客」と歌いながら町内を廻ります。本年も天候に恵まれ、子供たちも元氣一杯楽しんでいました。

この地に育った男の子達にとっては、一生一度の祝事であり、私も4年生の時にこの行事に参加させて頂きました。この思い出は大人になっても忘れられない故郷の思い出として残るものです。私たちは、古い民族風習としてこの地に残ったえびす子供頭、この灯を消すことなく後生に伝えていかなければなりません。

最後になりましたが、この行事の準備から本番まで御協力頂きました皆様方、またご芳志くださいました皆様方に、平成25年度子供恵比須頭関係者を代表しまして、心よりお礼を申し上げます。

世話人代表 田中 智大

世話人代表 田中 智大

空海と最澄の二人のお坊さんが、仏教修業のために博多港より唐天竺に渡られている。修業を終えられたお二人は、同時ではないが無事に博多港に帰朝されている。空海僧は、真言宗の弘法大師となられ、最澄僧は天台宗の伝教大師とされた。その途次弘法大師は、香月町の大根川のお話の雲に、聖観世音の梵字が現われたのをご覧になり、その下を聖地なりとされ観音大堂を建立されている。現在香月町の白岩観音大堂がそれであり、二十五坊を配置されているが、木屋瀬の愛宕さまは岡本坊と呼ばれその一坊である。笹田のお葉師さまも、この頃伝教大師の天台宗に改宗されたお話もあり、雨大師共に唐天竺に行くも帰りも、木屋瀬には足跡有縁な名僧であった。

徳川の世となり国内の道路が整備されて、何々街道と呼ぶ立派な道が出来た。九州では、国内で唯一港だけ外国との交流が出来る長崎港に通ずる長崎街道が、九州の国道第一号として完成した。これに宿場が整備されたので、これまでの宿駅木屋瀬も宿場木屋瀬と呼ばれるようになった。国内唯一の貿易港の長崎港に

昔話

木屋瀬(6)

「柴田豊廣遺稿集より」

まつられていた木屋瀬扇天満宮のお話である。慶応元年の正月長州征伐の騒乱のために、毛利藩内に滞在する事が困難となった三條実美、西三条季知、東久世通継、壬生基修、四条隆謨の五卿は、長州より黒崎、木屋瀬を通り赤間へと落ちて行っているが、木屋瀬では下町の森口屋にて休息されている。

木屋瀬宿の間屋に、問屋で扱っていた飛脚業務を取り扱う郵便所が新設された。しかもこの木屋瀬郵便所が、九州では第一号の郵便所と言われている。現在全九州の郵便局は約二千五百位あると聞いて

いるが、この中で木屋瀬の郵便所が、九州第一号と言われているのは、長崎街道が日本国でも最も重要な役目もつていたので、この街道の郵便物等の輸送をいつまでも飛脚等に依存する事もならず、郵便所に切り替えて、郵便事業を迅速にしなければならぬと考えられて来た。そこで全九州のどの地区よりも先に、木屋瀬を通っている長崎街道の二十五宿の間屋に郵便所が新設されたのである。この二

十五宿の郵便所が、明治四年十二月五日、同時に郵便業務を開始した。こうした発足で、木屋瀬を含む二十五宿の郵便所が等しく、九州第一号と言われていた。その後の郵便業務はどんどん発展し向上し貯金業務を取り扱う郵便所も出てきた。ここで福岡県内での郵便所貯金業務の取り扱いは開始した順位を二、三あげてみると、一番は久留米であり、小倉は三番目であり木屋瀬は九番目である。尚福岡は十四番であり、直方は三十三番である。この順位は、素直にその地区の経済力の現われと考えると良くはないだろう。木屋瀬は九番目の経済力があり国内重要道の町であり往時は大繁盛していたのである。宿場に郵便所が設置された。宿場に郵便所が設置された。宿場に郵便所が設置された。

木屋瀬宿安政六年「年中御用留」

木屋瀬村宗旨未進判

其の三

安政六年未八月の「宗旨改帳」には、春三月には木屋瀬村では五十人に及ぶ未進者(宗旨改の日に出現できなかった者)が、病気の治癒・旅や商売・出稼から帰宅等々で秋の宗旨改に出現したので二十名に減った。更なる速賀・鞍手郡宗旨奉行を通じての「村触書(通知文)」で、順次に宗旨改に際して最終的には男三人と女三人で計六人の未進者となった。この内の二人は、嘉永元年から安政六年に及ぶ約六年間と残る四人は安政二年から五ヶ年に渉り、宗旨改に出現せず「村触書」は連続して、氏名・年令・人相・着用衣類が記載されている。

六人の内男女二人は夫婦者である。右平(歳四十八)と女老、右平女房しづ(歳三十五)安政二年辰四月に「出奔」と書かれている。当時は家出を「出奔」とか「欠落」と呼び、欠落とは読んで字の通り「欠ける事」「崩壊する事」を指し、田畑や家屋敷を捨て逃亡して、行方をくらますことである。宗旨未進判の触書にも、数年にわたる未進者を「欠落」「出奔」と書き直している。

また、宗旨改未進者が旅や出稼で木屋瀬を出立の折に、「往来手形」や「宗門手形」を所持しないで、他国への道中で病死や不慮の災害による事故死すると横死と呼ばれて、村方の記録には「地方横死」と記載されている。そこで木屋瀬村六人の未進者については、出立した年の春秋二回の宗旨改の時に出現できない場合は、家族が病氣・旅等の理由で届けたであろうが、何年も続くと村方(村役所)で「出奔」と書き変えられるのであろう。

この村方出奔が五年も六年も続くと最後は木屋瀬村の人別帳(当時戸籍)から除かれる。(帳外れという居所を定めず放浪し、無頼を働く者を「無宿人」と呼ばれていた。勿論、誰もが好き好んで無宿人になる者もない、それなりの理由があると思う。

無宿人という烙印を押された者は、地元で何らかな罪を犯して遁走した者、悪行跡(よくない行い)を理由に勘当(主従・親子・姉弟の縁を切る)された者もいたが、多くは生活をする糧を失い貧困の為に余儀なく、村から出奔したのではなからうか。

当時の農村は天候不順や病虫害の発生で稲作の凶作が続いたり、商売の失敗・病気で稼を失って心機一転で出奔の行先は、近郊の都市であった。そこには新しい生活の場としての稼や仕事の需要が多く、何んと云っても人が大勢居住している事は人の目につき難いという事である。

しかし、現実には厳しいものであって、稼を得るための仕事を求めるには、自分の身分を証明する名主や家主の請書(保証人)や後見人が必要であった。

果して、宗旨改未進の右平夫婦・文六・とら・いね・善吉等は、宗旨未進判帳の安政六年の秋までは「出奔」と烙印を押されていたが、安政六年以後に木屋瀬に帰郷したのであろうか、または六人の内の何人かは、木屋瀬村の人別帳より「帳外れ」になつて、到頭「無宿人」となつたのであるか知る術もない。



正月恒例 木屋瀬いろは歌留多大会

正月恒例の「木屋瀬いろは歌留多大会」も回を重ね、今年は13回目となり総勢105名の方に参加していただきました。

子どもの部と一般の部(中学生以上)に分かれ、トーナメント方式で行いました。

会場は熱中する子どもたちの熱気に溢れ、こやのせ座運営部会ボランティアの皆さんが用意したぜんざいは、参加者の方に大変喜んでいただきました。

木屋瀬ならではの文化や歴史が織り込まれた【岩井屋不彫さんの木屋瀬いろは歌留多】今回紹介するのは【へ】。



- ▼入賞者(敬称略)
- 優勝: 宝田美陽 (木屋瀬小5)
 - 準優勝: 松岡宏武 (木屋瀬小3)
 - 第3位: 平岡樹弥 (星ヶ丘小6)
 - 花房拓真 (木屋瀬小2)
- 一般の部
- 優勝: 松岡沙知 (木屋瀬中)
 - 準優勝: 中村麻鈴 (木屋瀬中)
 - 第3位: 奥 雅照 (木屋瀬中)
 - 山下莉沙 (木屋瀬中)

屏の白いは西元寺

【説明】浄土真宗西本願寺派・白髪山・西元寺の山門から連なる白漆喰塗りの築地塀は、昔から祇園町通りの風物でございます。